

思いやりのこころを培う保育をめざして。

佐賀市 真生幼稚園 教諭 平岡亜弥子

これは、2011年8月20～21日に大阪市の追手門学院小学校で開かれた、全日本私立幼稚園幼児教育研究機構主催の幼児教育実践学会で、問題提起として発表したものの一部です。

問題提起者	真生幼稚園教諭	平岡亜弥子
協働研究者	東京外国語大学准教授	上原泉
コーディネーター	真生幼稚園園長	副島正幸

縦割り保育（オープン・エデュケーション）における子ども同士のかかわりから、共感性や思いやりの芽生えを大切に、それを培っていく。

【事例1】

毎年、1学期後半になると友だちと一緒にリレーを楽しみ始める年長児。人数が足りない場合は周りの友だちにも呼びかけたり、「僕もやりたい」と言ってくる年中・少児を仲間に入れたりして、集団で遊び出します。走る前から「年少さんと走る人はゆっくり走るんだよ」「こっちのチームは年長さんばかりだから、僕が代わってあげる」と、年齢の違うもの同士でリレーをするにあたって、みんなが楽しく遊べるために、力の差などをよく考えながら遊びを組み立てようとします。

遊びの中で、このように自然と年下の友だちのことを思いやることができるのは何故だろうかと考えました。昨年の6月に近隣の小学校の2年生が遊びに来て、園児と遊ぶという行事がありました。そのときにもリレーをしていましたが、そこで園児に優しく接し、ルールを臨機応変に変えながら遊びを組み立てようとしていたのは、他ならぬ、真生幼稚園の卒園生でした。もちろん、保育者の日々の行動が基となって子どもの共感性が育ち、思いやりにつながる人が多いのですが、異年齢での子ども同士のかかわりも重要な要素となるのではないのでしょうか。

年長児は、年少児の行動を見て、自分の年少(たとえば1年前)の時代を思い出し、共感～思いやりにつながります。年少児は年長児の行動(自分よりすぐれている点)を、1年後の自分を思い浮かべながら、憧れの目で見ることができると思います。

【事例2】

ある朝、お母さんを思い出して4歳児のA君が突然泣き始めました。「先生、A君が泣いているよ」と、それを教えに来てくれたのは、A君と大の仲良しのB君でした。先生がA君を抱きかかえ、その悲しくつらい気持ちを受け入れながら、落ち着くようにかかっていると、B君がA君の水筒を持ってきました。

「お茶を飲んだらいいんじゃない？」と、小さな声でささやくように言いながら、水筒をそばにそっと置くB君。そのあとも、なかなか涙が止まらないA君を気にして、積み木を持ってきたり、

粘土を持ってきたりしていました。

しばらくすると、A君の涙は止まり、お茶を飲んでからB君と遊び始めました。きっとB君は、毎日お母さんと一緒に保育室まで来ているA君を、こころの奥で心配していたのでしょう。友だちのことをこころから心配し、それに同情し共感して、「元気になってほしい」と手を尽くすB君の姿、そしてそれを喜んで受け入れるA君の姿に、担任の先生はとてもこころを打たれ、思わず涙が出たそうです。このような光景は、真生幼稚園では決して珍しくはありません。ただ、本当にこころを大切に保育を行っていないと見過ごしてしまうかもしれません。

今後幼児教育界では、共感するという言葉がますます重要になってくると思います。共感というのは「思いやり」につながっているからです。共感というのは、他者と喜怒哀楽の感情を共有することをいいます。たとえば知り合いが辛い表情をしているとき、相手が「辛い思いをしているのだ」ということが分かるだけでなく、自分も辛い感情を持つことです。そこから、「悲しい思いをしている友だちをそのままに置いてはいけない」という思いやりの気持ちが起きてくるのではないかと思います。このような感情は、人間に本能的に備わっているものといわれますが、この人間の本能が現代社会では歪められているような気がします。

平井信義氏は『思いやり』は、人格にとって非常に重要です。『思いやり』のある人に接したときには、心が暖まる経験をしたことがあると思います。『思いやり』は、相手の立場に立って考え、相手の気持ちを汲む力で、私は『共感性』という言葉を使っています。親としては、子どもの立場に立って考え、子どもの気持ちを汲むことです。」と述べておられます。

事例2は、幼児の思いやりをしみじみと私たちが感じる事例ですが、ここで興味あることは、「小さな声で」とか「そっと置く」ということです。なんともいえない、ほほえましく、かわいく、けなげな子どもの姿です。B君のやさしい思いが伝わってきます。子どものこころに寄り添い、子どもの声に耳をかたむける保育者を、子どもたちは無意識のうちに手本としているかもしれません。

共感性が友情を生み出します。友人になったきっかけは、「何となく」であることが多いのですが、その「何となく」の本性は、共感性だと思います。その背景として、子どもたちが普段よく自由に遊びこんでいて、相手のことをよく理解しているということではないでしょうか？

元気に遊ぶ子どもたちを見て、この子たちに「共感性」、「思いやり」がもっともっと育ち、幸せな社会づくりに貢献してほしいものだと思います。

【事例3】

役員会のため、来園してくる数人の保護者を眺めながら「私のママが来ない」と泣きだした3歳児のRちゃん。しばらくして母親が来園し、安心したように遊び始めました。その日の午後、役員会が終わって帰っていく保護者に気づき、Rちゃんは笑顔で見送ることができましたが、激しく泣き始めたのは満3歳児のTくんでした。

心配して駆け寄るRちゃんに、保育者は「さっきのRちゃんと同じ気持ちで泣いているんだろうね」と声をかけながら、Tくんの泣きたい気持ちを受け入れていました。そんなTくんの様子をしばらく見ていたRちゃんは、ふと、何も言わず周りに人形をそっと並べ始めました。いつしかTくんと保育者の周りが人形でいっぱいになり、Tくんはその中の一つの人形に興味を持ち、涙を止めて遊び始めたのでした…。

それから1週間ほどたった給食の時間、その日のメニューはスープでした。スープの日は手元が滑ってスープをこぼしてしまうことも少なくありません。満3歳児のTくんも派手にこぼしてしまい、服や机はスープだらけになってしまいました。そのことに気付いた保育者は、雑巾を取りに向かうのですが、そこでさっと行動を起こしたのが隣に座っていた3歳児のLちゃんです。

Tくんの服がスープで汚れていることに気づいたLちゃんは、何も言わずにさっと席を立つと、ティッシュを手に取り戻ってきました。そして、「大丈夫？」とTくんの服をふいてあげたのでした。

保育者はLちゃんの無意識的なその思いやりの行動に感動し、「先生が何も言っていないのにしてくれたの？ すごいね！」と言い、Lちゃんを抱きしめました。するとLちゃんは照れくさそうにしながらも、嬉しそうな表情をしていました。また、その姿を見た他の3歳児も、「私もやってあげよう！」とティッシュを取りに向かうのでした。

Lちゃんには今までこういった姿をあまり見ることはなかったのですが、Rちゃんが友だちを思いやる姿を見ながら、その姿に共感していたのでしょう。そして、その思いが、この日隣にいたTくんの様子を見て、無意識的に行動として出てきたのかもしれない。

満3歳児と3歳児は混合クラスであり、同じクラスで過ごしています。このような思いやりのある3歳児の姿は、まだ新学期が始まって3カ月しかたないころでも、よく見られていました。この事例からもうかがえるように、RちゃんからLちゃんへ、そして他の3歳児へも、思いやりのところが伝わり、温かい共感性が芽生え始めているのでしょう。クラスの雰囲気として、友だちの存在を感じ、思いやる気持ちが高まっていることは、大変嬉しいことです。Rちゃんは進級児であり、昨年も満3歳児クラスの中で、泣いている友だちがいるとティッシュを持ってきて涙を拭いてあげたり、給食のときにイスを持ってきてくれたりする姿が、いろいろな子に対して見られていました。昨年、満3歳児クラスの担任をしていた私にとっては、今年の混合クラスでの出来事は珍しいものではないのですが、やはりこころ温まる幼児の姿であると思います。そして、子どもたち間での学び合いが、実に大きいと感じます。無意識で、自然に出た思いやりの気持ちを、これからも大切にしていきたいと思います。

幼児が何も言葉を添えず、「そっと置く」という形の思いやりは、実に質の高い、こころに根ざしているものと考えます。ただ純粹に、友だちのことを思い、静かに行動に表すのです。保育者自身も、このような幼児の姿を見習いたいと思いました。思いやりというのは、相手をいたわる世話だけでなく、お互いの主体性を導き出せるような関係をつくることのように思います。

Rちゃんの年齢ですと、思いやりの芽生えかもしれません。個人差もあり、いつから思いやりが芽生えるかは簡単にはいえませんが、3歳から4歳ぐらいになると、他者から見たものの見方や感じ方を平均的には意識するようになると思われる。

子どもは、他者との関係性、交流を通じて、いろいろなことを学んでいきます。最初は、見様見真似で行っていても、積み重ねの中で、その意味することや他者への思いやりが確実に育まれていくものと思われます。保育の先生がそっと見守り、そのような関係性が育っていくような導き、環境づくりが子どもたちにもそれとなく伝わっていくものなのではないでしょうか。

共感性が育まれる過程が示されている心あたたまる事例と思います。

上原泉

子どもたちは生まれながらにして 他人の協力的な心づかいを得る力を 驚くほどもっている。

デューイ『民主主義と教育』

毎月の園だよりの中に、園長のことばがありますが、この園長のことばで事例3についてコメントした文章を読んだあるお母さんが、「何度よんでも涙がでる」という感想を連絡帳に書いておられました。自分の子どもではないのですが、幼稚園での子どもたちの姿が彷彿として浮かんでこられたことと思います。私たち保育者は、子どもの思いやりの行動と同時に、このようなお母さんの存在に感激し、涙が出たことでした。思いやりの保育というのは、何か子どもたちに道徳的なことを教えるのではなく、ごくありふれた子どもたちの行動に感動し、それを保護者が感じることによって、つまり保育者と保護者のこのころの相互作用によってなされている部分もかなり大きいものだと感じました。保育の奥深さと喜びを感じます。



重い槍(やり)

【感謝の気持ちを伝える保育者の実践事例】

「誰か机を拭いてくれるかな？」と保育者が言います。A君は喜んで保育者のお手伝いをします。「あら、A君、よくできたね、お手伝いしてくれてありがとう!」と保育者は笑顔で言います。保育者が子どもに何かをしてもらって、「ありがとう」と言う場面はよくあります。こういう場面をA君だけではなく、他の子どもたちも、幼稚園の生活の中でよく見ることがあります。そういう場面を何度も見ることによって、子どもたちは、「ああ、このようなときには“ありがとう”と言うのだな」ということを覚えていきます。もちろん、「ありがとう」と言うときの、保育者の嬉しそうな姿などもよく見えていますから、「ありがとう」という言葉が心地よい響きとなって子どもたちの心に浸みこんでいくのです。

幼稚園の保育者の役割というのは、数えきれないほど多いのですが、その一つに「モデルとしての役割」というのがあります。保育者はいつも子どもを見ているということはいうまでもありませんが、子どもに見られてもいるのです。見られているということも考慮して、保育の方法を作りだしているのです。「何かしてもらったら、ありがとうとお礼を言いましょうね」と子どもに教えるのは簡単なことですが、これはあまりいい保育方法とは言えません。「ありがとう」の意味は、保育者がこの言葉をどういうときに、どのような表情で発しているか、そして保育者が本当にありがたいと思っているのか、子どもが見ているところで模範を示すことによって、子どもが何となく理解していきます。そして、このようなときに、保育者から「ありがとう」という言葉が、演技ではなく自然と出ているということも分かってくると思います。つまり、保育者としての「人格」も分かってくるのではないかと思います。

子どもは保育者の言動を見て、それをモデルにして模倣することも多いのです。子どもに「ありがとう」と言う保育者の姿を真似するのです。そのとき「ありがとう」という言葉だけではなく、誉めるとか、笑顔とか、感性豊かな言葉とか、いろいろと保育者の工夫があるわけです。しかし、本当はそれは保育方法というのではなく、保育者として当然備わっている「人格」なのです。本当に保育者がこのようなところになっているのか、実際は反省することも多いのですが、日々精進を心掛けています。

ありがとうを言うとき、人は笑顔になる。
ありがとうを聞くとときも、人は笑顔になる。
ひとつのありがとうに、ふたつの笑顔。
ありがとうを言える生命に
ありがとうを言う。

P.マッセン N.アイゼンバーグ=バーグ「思いやりの発達心理」より

多くの研究者たちが共感性を利他的行動の主な動機だと考えている。前に見たように、アロンフリードは、共感性の発達についての詳細な社会的学習理論の立場からの説明を行っている。その考えによれば、共感性は発達の早い時期に条件づけあるいは連合によって習得される。このことは、子どもの喜びの感情とそれに対応する他人の感情の表現とが、繰り返し結びつけられることによって起きるのである。

精神分析理論では、共感性は幼い頃の子どもと保育者（主に母親）との相互作用によって発達するとされる。というのは、保育者の気持は、身体的な接触や声の調子、表情などによって、赤ん坊に伝えられるからである。別の人々は、共感性の発生にとって保育者と赤ん坊との関係（特に赤ん坊の保育者に対する密接な愛着）が重要であるということ、条件づけの原理を使って説明している。

共感性と向社会的行動との関係についての研究（相関的研究や実験的研究）で得られた結果から、次の二つの結論を引き出すことができる。

- ① 共感性の水準は向社会的に行動する傾向を左右する有力な要因である。
- ② 共感性の能力はかなりの程度、訓練や経験によって高めることができる。

家庭や学校、教会といった自然の場面では、親やその他のモデルは、自分で向社会的行為をしながらお説教をしていることが多い。こうしたお説教（ことばで説明したり教訓を与えたりすること）は、子どもの向社会的行動の促進に効果があるのだろうか。いくつかの実験結果によると、お説教はモデルの実際の行為よりもかなりの程度効果の薄いものである。

「モデルが慈悲深く行動すれば、たとえモデルが欲張ったことを口にしても、子どもは慈悲深い行動をとる。逆に、モデルが慈善についてお説教しても、実際に欲深い行動をすれば、子どもはモデルの行動に従い、慈善事業に寄付したりはしないだろう。この面の行動はことばによって左右されるのではなく、主に行動によって左右される。」

親への愛着行動が初めの段階で安定しなかった幼児は、後の段階では大人の遊び仲間を避けようとする傾向を示し、後ろを向いてしまったり目をそらしたり、いっしょに遊ぶことを拒否したりすることが多かった。このことから推測できることは、幼児期での母親に対する強い愛着が、後の時期の他人に対する関心や社会的相互作用をもつことの予備的条件となっているということである。さらにいえることは、母親に対する愛着から生じた強い信頼感と安全感とをもっている子どもたちは、自分自身の欲望にとらわれることがなく、相手の要求や感情に注意を向けることができ、相手の「身体言語—ボディ・ランゲージ」、喜びや苦しみ、穏やかさや緊張の表現に目を向けることができるのである。

子どもが発達の初期に身につけた共感能力は、その後に出会う出来事によって変えられるものである。すでに見たように、両親がしつけの技法として誘導的なやり方をし、他人の感情や情動に注意を向けさせようとした場合には、おそらくは共感性の発達が早まるであろう。これとは反対に、両親が規則をきちんと守らせることに固執して、相手の感情を無視するようなやり方をした場合には、共感性の発達は妨げられることになるだろう。

コメントにある通り、口で教えるだけでは身につくようなものではなく、モデルの存在というのが大きいと思います。保育者をよく子どもはみています。園で、先生方の行動をみて、真似して、その意味や状況を理解していく部分は大きいと思います（家では、親になると思いますが…）。

縦割り保育は、少し年上のお兄さん、お姉さんが、年少のお子さんのモデルになると思います。（年齢的に）より身近な存在である子どもの行動は、年少の子どもは関心をもってみえていますし、真似も多いと思います。きょうだい数が少なくなっている近年では、縦割り保育を通じて、子どもが学ぶことは多いと思います。年長の子どもにとって、年少の子どもに配慮して接するという経験は、年少の子どもの立場にたった見方を意識して接する必要がある、共感や思いやりの育成につながっていくと思います。

上原泉

『おめでとう』・『ありがとう』

ボクは、ずっと 誕生日を祝ってもらうもんだと、思ってた、

だけど そうじゃなくて、

お母さんやお父さんに アリガトウを言う日なんだって気がついて、

だから今 生きている事を

「あたりまえ」だなんて思わないで 「幸せ」なんだ

ナカムラミツル(中村 満)



ナカムラミツルさんは、真生幼稚園の出身です。つい先日お寺参り(潮音寺=真生幼稚園)されましたが、私も偶然会うことができ嬉しかったです。